

[序論]

研究動機・研究目的・研究方法

筆者はハンドボールを始めて10年目となるが、ハンドボールから離れてしまったプレイヤー達から、また始めたいという声が多く寄せられる。これは、ハンドボールがとても魅力的なスポーツであるという事を示していると考えられる。小学校学習指導要領(平成10年度版)で、「ハンドボールなどその他のボール運動を加えて指導することができる」(文部省、1999)となったが、実際の小学校、中学校におけるハンドボールの授業や活動の実態はよく知られていない。そこで、小学校・中学校ではハンドボールに対してどんな認識を持ち、授業や活動をしているかについて知り、これまでとは違った角度から、ハンドボールについての知識を深めていきたいと考え、本研究を着手するに至った。

本研究では、これからのハンドボールの普及へ向けて、どういった働きをしていく事が望ましいかを明確にし、生涯スポーツとしてのハンドボールを確立していくための手がかりとなる知見を得ることを目的としている。

方法として、ハンドボールの認識内容と活動実態を知るために秋田市内の小学校、中学校の体育主任の先生方へのアンケート調査を行う。そしてその調査結果を生涯スポーツの視点から、分析・検討することにより、現在認識されているハンドボールの課題が見えてくると考えられる。

[本論]

第1章 ハンドボールの特性論

ハンドボールは、手でボールを扱い、走・跳・投がバランスよく含まれている。そのため、児童から成人、高齢者までの体力増進のための運動として、適切であると考えられる。また、今日では、児童に関して体力・運動能力の低下が指摘されている。

ハンドボールは、こうした児童の発育・発達を促すのに適していると考えられる。さらには、ハンドボールの構造特性を考えると、ボールが扱いやすい、誰でも親しみやすいなどの特性から、教材づくりや戦術学習が容易に行うことができると考えられる。ハンドボールのゲーム教材を通して、確かな戦術学習を行うことで、教材内容を児童に身につけさせることができる。さらには、その経験が、有意義な生涯スポーツを実践するための基盤になる可能性へとつながっていくのである。

第2章 生涯スポーツの概念

子どもから高齢者まで、それぞれのライフステージにおいて、それぞれの興味や関心、適正などに応じてスポーツを楽しむことを生涯スポーツとされる。根幹となる活動がしっかりと地域という土壌に根付き、基盤がしっかりとできれば、地域住民に開かれたスポーツ環境が作りあげられ、社会全体を明るく活気に満ち溢れたものにするのである。

第3章 ハンドボールの教材価値、及びスポーツとしての価値に関するアンケート調査

対象・方法・調査法 秋田市内にある小学校・中学校全75校の体育主任、75人を対象とし、

郵送調査法を用いてアンケート調査を実施した。75人中50人の回答を回収することができたため、66.7%であった。

仮説 ハンドボールに対する教師の認識内容と活動実態を把握するため、次のような仮説を立てた。

①実際にハンドボールという競技に触れたことがある。②ハンドボールには教材としての価値が多く含まれていることが理解されている。③指導者と運動、特にハンドボールとの関わりについて明らかにする。④いずれはハンドボールがもっと行われるようになると捉えられている。

これらの仮説を基に4項目からなる質問をした。①ハンドボールへの、教師の一般的な認識について。②ハンドボールへの、教師の教材的な認識について(ハンドボールに対する取り組み・ハンドボールの授業に対する、子どもたちの予測される変化・ハンドボールの授業を通して予測される変化・ほかの教材との関係)。③教師の運動経験、活動実態、運動との関わりについて。④これからのハンドボールについて。

結果 アンケート結果及び考察から、教師の認識内容と活動実態として次のようなことがわかった。①多数の教師が授業や講習などでハンドボールに触れたことがある(図1)。②ハンドボールには、児童・生徒の関心、意欲、態度を高めるといった、教材としての価値が多く含まれている種目であることが理解されている(図2)。③教師の過去の運動経験とハンドボールとの関わりが薄いことから、ハンドボールのクラブチームのプレイヤーや指導者としては考えられていないが、授業という形でのハンドボールはやってみたいと、多数の教師に考えられている。また、授業では6割の学校で実施されていないが、3割もの学校で実施されている(図3)。④テレビやラジオ、新聞といったメディアを利用しないという条件の中では、授業で実施していくことが、普及していくためには、最も有効である。また、時間はかかるがいずれは普及していくと考えられている。さらに、今あるハンドボールチームが学校へ出向き、実際にプレーを見てもらう事も普及に有効であるという認識がされている(図4)。

[結論]

今回の研究では、次のことが認識できた。①どのような条件であってもハンドボールを楽しむ環境作りがこれから大切になってくる。②ジュニア期からトップレベルに至るまで、一貫した理念に基づいた、最適な指導体制を構築し、地域の強化及び普及拠点を整備していく。③今あるハンドボールチームが小学校や中学校を訪問し、実際にハンドボールを見る機会を設けていくといった活動が有効である。

本研究では、ハンドボールが価値あるスポーツとして認識されていることを理解できた。生涯スポーツとしてのハンドボールを確立していくための働き方についても明らかになった。ハンドボールプレイヤー、指導者、保護者、そして地域、学校が一体となって施策を展開させていくことがハンドボールの一層の発展につながるものと思われる。筆者も、これからもハンドボールの素晴らしさを伝えていきたい。